中国社会文化学会 例会のご案内

このたび東京大学客員教授として来日される清華大学の王中忱先生をお招きして例会を催します。王先生は比較文学、東アジア近代文学史・文化史を専門とし、滞日経験が豊富な知日家です。近代日本の文学や歴史にも造詣が深く、この機会に文化や理論の「翻訳」実践をめぐる研究成果の一端をご披露いただくことになりました。報告と質疑応答はすべて日本語で行われます。

みなさまお誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

記

日 時：2012年12月15日（土）午後4時から6時まで

場 所：東京大学駒場キャンパス18号館4階会議室（コラボレーションルーム4）
（京王井の頭線 駒場東大前駅下車）

報告者：王中忱（清華大学中文系・教授）

題 目：重訳・誤訳と文芸政策としての理論生産——レーニンの「党の組織と党の文学」の中国語訳を手掛かりとして

概 要：1930年代にレーニンの「党の組織と党の文学」は、左翼文学の理論家である馮雪峰によって日本語から重訳されたが、1942年に、延安で再び中国共産党機関紙『解放日報』の編集長を務めた博古によってロシア語から訳された。毛沢東の「文芸講話」のなかに引用されたのは馮雪峰の重訳ではなく、その博古の訳文である。ところが、1980年代になって、毛沢東の秘書をつとめ、「文芸講話」の記録整理・加筆に関与した胡喬木は博古の訳文の「誤訳」を指摘したうえで、改革解放時代いわゆる「新時期」の文芸政策論を打ち出した。本発表は以上の歴史を辿りながら、「重訳」、「誤訳」と文芸政策としての理論生産を検討してみたい。

言 語：日本語

司 会：村田雄二郎（東京大学大学院総合文化研究科）

主 催：中国社会文化学会

共 催：科学研究費補助金基盤研究（B）「現代中国思史構築のための中国知識界言説研究」（代表 石井剛）